

(報告) 小学生サマーキャンプの実践と課題

中 村 修 也*

Summer-Camp for Primary School Children and Problems that Follow

Shuya NAKAMURA

1. サマーキャンプの企画と目的

平成14年度から新指導要領のもとに学校教育が開始された。周知のことであるが、一般に明確なのは、週5日制と学習内容の3割削減である。その影響で、公立学校では休みとなった土曜日に、特別授業や土曜スクールを設ける学校が出てきた。

ゆとり教育が学力を低下させるということは近年来叫ばれ続けている。おそらくそれは事実であろう。だが、もし文部科学省が、学力低下をも覚悟して、それでも子どもたちに「ゆとり」を与えたいと考えているのならば、それはそれで一つの考え方であり、「立派な」方針であるかもしれない。だが、4月直前になって、文部科学省は、掌を翻して、「3割削減は最低ラインの提示に過ぎない」から、更に高度な学習を展開してもよいとか、能力に応じて特別学習クラスを編成してもよいなどという、公教育にあるまじき発言をするようになった。これは無定見と非難されても仕方ない有様である。

教育現場を無視した教育行政の結果は、「失敗」と残念がるだけではすまない。教育は実験であってはいけないと考える。実験される子どもたちは、なんの判断や選択もなく、

実験に組み込まれ、その結果を背負って生涯を過ごさねばならないからである。

それゆえ、新しい教育の試みは、綿密なシミュレーションのもとに、現場の意見を十分に聞いたうえで、社会的状況を整えて実施するのが理想であろう。ゆとり教育も、学歴重視社会をなくす努力をしながら行えば、もっと違った成果を得られたのではないかと考える。

だが、文部省と政府は、教育実験に対する社会の調整をすることなく、ゆとり教育という実験に踏み切ってしまった。因果関係はともかく、その結果、若者の学校中退者の続出、フリーターの増加、少年犯罪の激化などの社会現象が生まれた。学校内においても、不登校、いじめ、学級崩壊・学校崩壊が顕在化した。

このような結果が出てから、「いきる力」をつけなければいけないというのは、いささか失笑を誘うような後手対応ではなからうか。

「いきる力」は「ゆとり教育」と同時に展開すべきではなかったか。そして、それらを当時の現場教師がどれだけ実行することができる状況と能力であったかの検討もおそらくはなされていなかったと考える。

これらを考え合わせると、子どもの保護者としては、公教育に自分の子どもを任せるわけにはいかない、という結論に達するである

*なかむら しゅうや 文教大学教育学部

う。すると、私立学校への期待が必然的に高まる。よりよい私立学校への入学競争が激化する。そのことは、まったく「ゆとり教育」とは逆の現象を生み出す。そして受験地獄に泣くのはまたも子どもたちである。

だが、はたして3割削減しなければいけないほど、現代の小学生は知的学習能力が低いのであろうか。また、「総合的学習の時間」という個別単元がないと、さまざまな経験ができないほど、社会は閉塞状況にあるのであろうか。おそらく「否」である。むしろ、文部科学省の度重なる教育行政の変更に右往左往させられている現場教師がしっかりとした教育方針と信念をもって行えば、それだけでも随分と子どもたちの学習意欲や学習達成率は高まるのではないかと考える。「ゆとり」や「生きる力」が必要なのは、子どもたちよりはむしろ教師の側ではなからうか。

私が今回、サマーキャンプを計画したのは、以上のような問題意識を持ったからである。夏休みに塾の夏期講習に追われる小学生を解放して、昔ならば各家庭で行っていた田舎での体験を小学生にさせること。小学校教員志望の大学生に、早い段階で小学生に接触させて、教育経験をもたせて、教育者になるためのモチベーションを高めること。この2点を目的としてサマーキャンプを企画したわけである。

具体的な計画としては、文教大学教育学部の3年生にサマーキャンプの教師を勤めさせ、文教大学付属小学校の4・5年生を指導させるというものである。国立大学では、3年次の教育実習が普通になっているが、私立大学では、まだ3年次の教育実習が認められていない。そのため、4年次における教育実習となっている。これは教員志望者のモチベーションを下げている。3年間以上のモラトリアム状況があるため、漠然とは教員志望の気持ちはあっても、実際に現場を体験しなければ、自覚は持てない。4年次の6月の教育

実習を経て、やっと「自分は教員になりたい」という強い自覚を持てるようになるのである。しかし翌7月には、はや教員採用試験である。これでは、やる気が出た途端に、結果が出てしまうわけで、自覚への努力の期間が設定されていないということになる。

そこで、3年次の夏に、サマーキャンプという形で、擬似教育実習を体験し、教員への自覚を養おうというものである。このサマーキャンプを連年続けることにより、3年生の自覚の形成にも役立ち、文教大学の3年生の実力が、教育実習に耐ええるものであることを、小学校関係者に知ってもらいたいという気持ちもあった。本来ならば、文教大学が所在する埼玉県越谷市内の小学校に、一般参加募集をする方がよいのかもしれない。しかし、やはり教育は実験ではないから、夏休みといえども子どもたちに対しては、失敗は許されない。

付属小学校であれば、文教大学の大学生と接触経験もあり、毎年、多くの教育実習生と接している。さらに小学校の教員との打ち合わせも綿密にでき、事前準備の充実が計れるといった利点がある。サマーキャンプは数日の宿泊を伴うから、4年生以下では難しいし、6年生では受験があると考慮して、付属小学校の5年生を対象に計画を立ててみた。実際には、小学校校長の助言によって、4年生・5年生の2学年を対象とすることになった。5年生でも、すでに受験態勢に入っており、塾の夏期講習の関係から、参加者は少ないと予測されること。4年生はすでに宿泊学習を経験しており、宿泊には問題がないということがわかったからである。

サマーキャンプといっても、単なる体験学習では、旅行会社が最近企画している「体験ツアー旅行」と変わらなくなるし、大学生の実体験としての意味も薄れるので、午前中は学習、午後は体験学習を基本路線とした。宿泊学習としては3泊4日が妥当な日数である

うが、あえて4泊5日とした。それは、わずかな期間でも、一応のまとまりのある単元学習にはその日数が必要と考えたからである。

場所は長野県八ヶ岳にある、文教大学の学寮に決めた。その理由は、八ヶ岳という自然の中に子どもたちを連れてゆきたいということが第一の理由。第二の理由は、宿泊費が安くあがるということ。第三番目に、私自身が何度も訪れており、地の利があるということであった。

ひそかな目論見としては、国語と社会を学校教育とは別の形で子どもたちに教えてみたいという気持ちがあった。もちろん、これを押し付けるつもりはなく、自然とそういう結果が生まれればいいなという程度の願望である。それというも、近年の小学校では、「国際社会」「国際化」の美名のもとに、英語教育が導入されているが、その一方で国語の充実が閑却されているからであり、高校社会では西洋史が必修となる一方で、日本史が選択授業となっているからである。

英語を身につけることはよいことであるが、それはなにも小学校ですることではない。語学教師にいわせれば、語学の習得は早ければ早いほど効果があがるという。それは日本語教育においても同じで、小学校段階でしっかりと母国語をマスターしなければ、後々、実社会でその子どもは苦労することになる。むしろ外国語は苦労してもいいから、母国語をしっかりとマスターしてからにしてほしい。極端な例をあげれば、川端康成は英語が得意だったからノーベル文学賞に選ばれたのではなく、美しい日本語の作品が書けたから、世界の文学者になれたのである。

それは歴史においても同じことである。自分の国の歴史を知らないで外国史(世界史)を知ることにとれほどの意味があるであろうか。いや、アメリカ人が日本人にアメリカ史を尋ねることがあるだろうか。アメリカ人が日本人に尋ねることがあるとすれば、それは日本

史についてであろう。そして外国史はあくまで日本との関係史において必要なのである。

もちろん海外派遣などをされた時、行く先の国の歴史を調べることは必要である。その際においても、日本との比較ができて初めて文化の違いが理解でき、正しい対処が行えるのである。自国史を知らないということはアイデンティティを喪失しているのと同じことであり、そのような人間は国際人にはなれないと考える。そこで、学校教育から影の薄くなった日本史を、このサマーキャンプで子どもたちに楽しく学んでもらいたいという気持ちがあったのである。

2. サマーキャンプの準備と経過

準備は、サマーキャンプに参加してくれる大学生の募集から始めなければいけない。私の計画では、小学生30人に対して10人の大学生を募集しようと考えていた。10人という人数は、次のような考えからはじき出された。

まず、30人を6班に分け、各班に1人のリーダーを設定する。記録係をビデオとカメラで2人。救護班を1人。私と大学生との連絡係兼総括役として1人。計10人というわけである。もっとも、経済的な観点からも10人が限界であった。大学生には、ボランティアとしてサマーキャンプに参加してもらうので、宿泊費や交通費をできるだけ負担させたくなかった。そのため、大学生の人数が増えれば増えるだけ、作業が楽になることは分かっていたが、その一方で、大学生の経費が高むことも明白であった。

計画を立てた段階では、小学生たちが何人参加してくれるかは未知数である。小学生の参加者が10人程度ならば、大学生にも宿泊費くらいは負担してもらわなければならない。大学生募集の時点で、そのことは厳格に念押ししておいた。

最終的には、社会専修4人、数学専修1人、美術専修4人の計9人が参加してくれた。私

としては、あと国語専修と理科専修・家庭専修の学生も参加してほしかったが、考えてみれば、どの専修の学生も、小学校全科をこなさなければならないのだから、かえってよい体験になったのかもしれない。

とにかく、先のメンバーで午前中の学習(算数・国語・社会)と午後の活動(理科実験・図画工作・調理実習)をこなさなければならない。学生たちには、それぞれの授業案を作成してもらい、模擬授業を実施したうえで、授業を組み立てなおすという段取りをとった。

ところが、学生メンバーが揃ったのは、数学専修の学生が5月29日、美術専修の学生は6月末ようやく揃ったという状況で、模擬授業も4回ほどできただけであった。算数に至っては、直前になってできなかった。工作のキャンドル作りは、美術専修の学生が独自に経験しており問題はなかったが、全員が作成方法を会得しているという状況には持っていけなかった。

調理実習については、7月4日にほうとう作り、5日にカレー作りを実施した。家庭科の石井先生の指導の下に、調理実習室で実施した。この段階では、ごく基礎的な調理方法を大学生に会得させ、更に味の調整を行うべく、レシピを検討し、再度、調理実習を行う予定であったが、その時間的な余裕はなかった。

本来ならば、大学生が完全に調理の手順をマスターし、それを小学生に指導するという段階にまで至っていないといけないのであるが、とにかく時間がなかった。なぜならば、7月に入ると、試験週間が直前に来ており、実際には試験期間前に実施される試験・レポートがあるため、3年生の大学生たちは、自分の学業のことで手一杯の状態にあったのである。これは、企画者としての私の計画ミスである。7月28日からのサマーキャンプは、試験週間終了後すぐの実施であり、その前に

学生たちが試験に対応しなければならないことを考えれば、準備期間をもっと早くに設定しなければいけなかった。

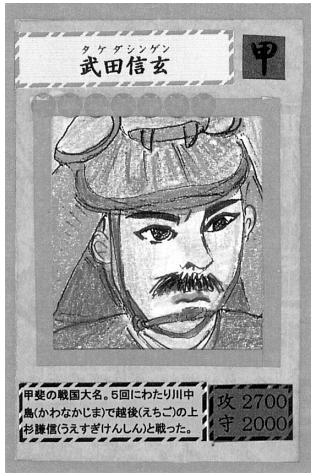
その意味では、最後の追い込みを黙々と行ってくれた学生たちに感謝しなければいけない。ことに社会専修の4人は、独自の判断で、八ヶ岳学寮に事前調査に出かけたのである。これによって、学寮の備品状態がかなりはつきりとして、文教サービスを通して、購入してもらおう物、こちらから用意しなければいけない物品が明確になった。

そして、サマーキャンプの目玉商品として、もっとも準備に力を入れたのが、「文教戦国村カードゲーム」の作成である。

「文教戦国村カードゲーム」とは、小学生たちの間で流行っているカードゲームを歴史学習に利用したものである。カードゲームの発祥を正確に位置づけることはむづかしいが、現代の子どもたちの間で爆発的に流行したのは、ポケットモンスターというアニメーションのカードゲームである。通称ポケモンはテレビアニメとして、日本だけでなく、アメリカをはじめとして世界中で爆発的にヒットした。そしてそこに登場するキャラクターがカードとして売り出されたのである。

このキャラクターカードには攻撃力や守備力、得意技などが表示されており、このカードでバトルすることができる仕組みになっていた。このカードバトルも普及し、ポケモンカードバトルの公式試合も開催されるようになった。これはプレイステーションやゲームボーイのゲームのカード版であり、テレビのポケモンバトルのカード版であった。

漫画においてもカードゲームそのものを主題にした「遊戯王デュエルモンスター」が『週刊少年ジャンプ』に連載され、これもヒットして更なるカードゲームの流行をみた。カードの流行は、大人にも普及し、カードそのものが商品として市場に出回るようになり、レアカードには高額が付加されるようになるな



ど、社会現象、社会問題も生み出した。

そういったことはともかく、子どもたちは新しいカードが出ると、すぐにカードのキャラクターとそのルールを覚え、さまざまなカードゲームを楽しんでいた。初期のポケモンだけで151体のポケモンがいたがすぐに覚え、「遊戯王」カードに至っては、何百枚という数のカードが発売されていた。

つまり子どもたちは、興味さえ持てれば何百であろうが名前を覚え、そのキャラクターの性格を把握できるのである。これを歴史に応用すれば、あつという間に授業では嫌われている歴史の暗記部門は解決すると考えた。

そこで、歴史上の人物と歴史的な事件、用語をカードに仕立て上げてカードゲームを作ること考えたのである。その際、さまざまなカードゲームの中から、「遊戯王」カードを取り上げて、これを手本として作成することにした。その理由は、このゲームが一番オーソドックスなルールを備えていたからであり、普及率も小学生には高いと判断したからである。

そこで、一番戦闘的の魅力のある戦国時代を選んで、上掲のようなカードを作成した。

遊戯王カード	戦国カード
モンスターカード	戦士カード
魔法カード	忍術カード
トラップカード	戦術カード

上記のような対応で、その効果や役割をそのままスライドさせて使用できるようにした。これについては、学生や大人には説明があるが、小学生にはほとんど不要で、「遊戯王」と同じだよ、と言うだけで理解してもらえた。

そして、デッキというカードのグループを4種類作った。それは甲斐デッキ(武田信玄軍)・越後デッキ(上杉謙信軍)・尾張デッキ(織田信長軍)・畿内デッキ(堺衆・畿内武将軍)である。1デッキは40枚のカードで構成されるようにした。

それぞれのデッキには、覚えて欲しい人物名・事象・戦術が、戦士カード・忍術カード・戦術カードとして書き込まれている。

たとえば、武田信玄には、次のデータが書き込まれている。

武田信玄(タケダシンゲン)

「甲」レベル7

「甲斐の戦国大名。5回にわたり川中島(かわなかじま)で越後(えちご)の上杉

謙信(うえずぎけんしん)と戦った。」

攻2700 守2000

そしてルールブックに「召還条件：武田晴信カードと武田信虎カードの2枚を生贄とする」と定めた。

武田信玄の召還条件は、若き日の信玄が晴信と称していたこと、父の信虎を駿河に追放して初めて武田家を継承できたという歴史を下敷きにして設けた条件である。

また、畿内デッキには、堺衆として千利休・今井宗久・津田宗及の3人のカードを作成した。この3人は戦国時代を代表する堺の茶人であるが、教科書ではせいぜい千利休しか登場しない。そこで、3人を覚えてもらうために、3人が手札に揃えば、尾張デッキから織田信長を召還できるという特殊効果を付与した。これは、この3人が共に織田信長の茶頭であったという歴史を踏まえてのことである。

このように、さまざまな歴史事象をカードに盛り込んで、カード作りを行った。

この戦国村カードの作成は、基本的なカードの内容は私が考え、それを学生たちが現実のカードに作成していった。キャラクターなどの絵から始まって、デザイン・キャラクターの解説など、細かな作業がいくつもいくつもあった。これらを試験準備の中で連日、半徹夜状態で作成していったのである。学生たちの頑張りが最高に達した時であった。

ケント紙への画像の書き入れ・両面カラーコピー・裁断、どれも高度な技術を要するものであったが、なんとかクリアしていった。そして出来上がったカードを、私は小学5年生の息子に1セット与えて、その反応をみた。息子の喜びようは筆舌に尽くしがたいもので、早速、翌日友達とそのカードを使ってゲームを楽しんだ。友人たちも夢中になった。私は、「これは、いける」と確信した。

そこで、息子に「学校の先生にみせてごらん」とカードを学校に持って行かせた。する

と、その小学校の先生も、歴史教材として使えるから、このカードに関しては学校での使用を許してくれた。そして、息子はわずか2日で、ほとんどのカードの名前とキャラクターを覚えてしまった。

私も戦国村カードゲームを息子とすることでルールを覚え、それを更に学生たちに伝授した。学生たちもすぐにルールを覚え、あやうくはまりそうになった。やはり、カードゲームには単純な魅力があるのだと、再確認した。この時点で、40枚×4＝160枚の戦国時代の人名・用語を、サマーキャンプ参加の小中学生たちに覚えてもらえることを確信した。

他方、私の方は付属小学校との連絡を取り、小学生の参加者を募った。校長先生に、私の考えを述べ、理解をしていただいた上で、協力をお願いした。幸いにも、この計画が一年きりのものではなく、継続するものであるということで、賛同を得ることができ、全面的に協力していただけることになった。サマーキャンプ担当のS先生も決めていただき、S先生には具体的な窓口となっていただいた。

そして校長先生とS先生から御指導を受けて、小学生の保護者に向けて、次のような案内文を配ることになった(次頁参照)。

その結果、4年生・5年生合わせて36名の参加希望者が集まった。予定の30名より6名も多い、うれしい悲鳴があがる結果であった。

3. サマーキャンプの実践と問題

サマーキャンプの日程は保護者への案内プリントにあるとおりであるが、実際に行ってみると、その大変さは予想をはるかに超えていた。正直なところ、学生たちは2日目で力を使い果たしていた。

当時の様子を伝えるために、私の日記を引用することにしよう。

7月28日(日) 晴. 6:30に家を出る。

8:00前に石川台駅に到着。男子学生2人とホームで一緒になる。小学校に行くと、女子学

(報告) 小倉住サマーキャンプの実践と課題

4・5年保護者各位 平成14年6月14日

文教大教育学部助教・中村俊也

文教大サマーキャンプについて

新緑が輝きに輝かれ、緑が目に鮮やかな季節となりました。あと2ヶ月もしないうちに、夏休みとなります。いつの間にか2週間もあつと存じます。文教大等から、以下のような自主学習の学習上、小倉住ならではの体験学習を盛り込んだ、サマーキャンプを計画してまいりました。ご参加くださいますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

記

1. 目的 ○八ヶ岳の自然の中で、算数・国語・社会の重点学習を行い、楽しみながらより深い理解をえる。
○朝の目にするこのとこの自然を観察し、理科学習に取り組みながら、自由研究を行い、さらに、それを基盤に生かして、作品を仕上げる。
※この企画は、文教大教育学部教員の中心軸軸が教育学部3年生の大学生と小学生の交流を目的に企画し、小学校に協力していただいたものです。
2. 引継者 入学者員2～3名 入学生約10名
3. 募集 小学4・5年生を対象として、30名前後
4. 期 日 7月28日(日)～8月1日(木) 4泊5日
5. 集合 7月28日(日) 午前8時30分 付属小学校集合
6. 出発 7月28日(日) 午前9時00分 出発
7. 帰着 8月1日(木) 午後4時30分 付属小学校到着予定

※ 運送の状況によって時間が前後する可能性があります。

8. 旅程
 - 28日(日) 東京―集合坂―八ヶ岳到着―散策・写生―夕食
 - 9:00発 12:00昼食 14:30到着 15:00～18:00 18:30
 - 29日(月) 学校にて勉強と体験学習
 - 算数・国語・社会の勉強―ほうとう作り+工作―夕食―ゲーム大会
 - 9:00～12:00 (昼食12:00) 13:30～18:00 18:30
 - 30日(火) 学校にて勉強と体験学習
 - 算数・国語・社会の勉強―カレー料理+自然観察―夕食―夜明けの自然観察等
 - 9:00～12:00 (昼食12:00) 13:30～18:00 18:30
 - 31日(水) 学校にて勉強と体験学習
 - 算数・国語・社会の勉強―自然観察+清流発見―夕食+キャンプファイヤー
 - 9:00～12:00 (昼食12:00) 13:30～18:00 18:30
- 11日(木)
 - 学校―体験工房(おいしい学校)等体験―集合坂―東京
 - 9:00発 10:00～18:00(昼食) 10:55分12:07:30 14:00 16:30

9. 学習内容
 - 算数は分教と図形を重点的に扱います。
 - 国語は、八ヶ岳の自然の中で「くまかみむり」「きへん」の漢字を、成り立ちとともに覚えることと、ローマ字の習得を日習します。

社会は、日本の戦国時代を、カードゲーム化して、楽しみながら理解します。その他にも、いろいろなイベントを考えています。

10. 毎日のタイムスケジュール

7:00 起床
7:30～8:30 朝食
9:00～11:45 算数・国語・社会の勉強
12:00～13:00 昼食
13:30～16:00 午後の観察や壁画工作
16:30～18:00 夕食の準備・調理体験・散策等
18:00～19:00 夕食
19:00～20:00 入浴
21:00 就寝

11. 費用 3,500円 (宿泊費10,000+学習費・教材・食料費等13,000)
6月19日までに必要事項を記入の上、申込書と費用を封筒などに入れ、担任までご返付ください。

12. 服装 夏の私服 白ソックス スニーカー

13. 所持品
 - バジマ □トレーナー □ウインドブレーカー □エプロン □下着(4) □靴下(4) □
 - 雨具 □洗面用具 □タオル □バスタオル □ビニール袋(汚物入れ用2～3枚) □エコケック
 - トサ (歯ブラシや歯ブラシは必ず) □ハンカチ・ちり紙 □筆記用具 □除菌の具セット □消毒薬
 - (備わ) (虫除) □水筒 □服類 (Tシャツ等) 3枚程度
 - ※所持品には全て名前をつけてください。□にチェックを入れ、忘れ物のないようして下さい。弁当やお弁当はこちらで用意します。

14. 小遣い 3,000円以内

15. その他
 - 荷物はリュックなどのカバンに入れてください。また、現地で移動するときのために、小さなナップザック等をご持参ください。
 - 宿舍への電話は緊急時以外はご遠慮ください。携帯電話の持ち方はできません。
 - カメラの持参は自由ですが、自分で操作・管理できることを前提とします。
 - 保険証は、小倉の住所を借用します。また、健康上、特に関心すべき点(食物アレルギー)などがありましたら、下部提出事項にて、お知らせください。
 - 文教大サマーキャンプは、重要な学習の場であり、機会です。日常のより長い期間作りの一環となりますよう、ご指導・ご協力ほど、お願ひ申し上げます。

16. 荷送先 文教大八ヶ岳 〒407-0801 山梨県北巨摩郡高根町青里 3545
TEL 0551-482607

申込書

届出事項 氏名

① 平熱	② 用便こしの要	有	無
③ その他			



絵手紙作り



算数の授業風景

生2人がすでに来ていた。小学校にはS先生・O先生・M先生，用務のおばさんが来られていた。

8:30に校庭に集合して，簡単な紹介。小学生1人が遅れてくる。

バスに乗ってからの点呼に時間がかかる。それでも9時に出発。道路事情がよく，10時には談合坂に到着。ここで20分のトイレ休憩。双葉サービスエリアで昼食。各班に分かれて食事。私とY・H・Dの4人分のみお弁当を購入。ここまでで4人の女の子が気分が悪いということで，前の席に移ったが，とくに問題なくすんだ。

バスの中のレクリエーションは，子どもを立たせ後ろを向かせるものが多く，問題があった。走行中は立たないのが原則である。また，子どもの声が小さいのが気になった。

バスからの乗降の際，学生の指示がきちんとできていない。なんとなくの雰囲気の中で，子どもの列を引き連れている。そのため，列が伸びたり，切れたりしていることに気付かない。また，車道の横断の際に，車をストップさせる役割を買って出る学生がいなかった。

13:40に学寮に到着。

14:00を過ぎてても学生のKさんは到着しない。いちおう，14:45に散策とスケッチを開始することにするが，準備が遅れて，15:15に延長し，さらに実際は15:30からの開始となる。

その間にKさん到着。私は写真係となり，

あとは学生に任せる。

荷物チェックによって，ビデオテープを入れ忘れていたことに気付く。子どもたちのスケッチが終わってから，5時過ぎに学生2人とビデオテープを買いに行く。帰り道で，桃の直販店を覗いたが，いたんだ桃が高値で売られていた。おやつには使えない。

校長先生が6時過ぎにみえる。

6:30夕食。ご飯やお吸い物をよそう作業でけっこう時間がかかった。明日はこれを改善しないと，食事が冷めるし，子どもたちがだれる。

子どもたちの食事を点検すると，ほとんど残してしまう子どもが2人いた。がんばってきれいに食べる子もいれば，適度に残す子もいる。これに関する指導まではサマーキャンプの期間内ではできないであろう。

一人，頭が重くて食事できない男の子が出た。食事前に体温を計ると，平熱より高い子がほとんどであった。食後の片付けの指示はできたが，その後の予定と明朝の予定についてのアナウンスが忘れられた。

子どもたちの入浴。女子学生がお風呂の廊下に閉め出されていたので，気にせずに風呂場に行って，入浴指導をするように指示する。11:00反省会。12:00になっても学生たちが子ども部屋のベランダ側のサッシを閉めに行かないので，いったん反省会をお開きにして，子ども部屋のチェックに行かせる。



ほうとうの麺作り



大川で川遊び

夜中にバタバタする物音がして、学生たちが何かしている気配がしたが、気にせずに寝る。明朝、Kさんに尋ねると、Sさんが明日の算数のことが不安になって、みんなに作業を強いたそうである。

7月29日(月) 朝霧。

5時に目が覚める。トイレに行き、ついでに子どもの部屋を見回る。校長先生が、102号室で子どもと一緒に寝ていた。

6時に5年生女子が2人やってきて、1人の女の子が気分が悪いと告げてきた。学生のKさんに伝えて、201号室に先に向かう。額に手を当てて熱をみるが、特に熱があるわけではない。状態を問診すると、昨日からバスに乗って以降、時々、お腹の方が気持ち悪いそうである。緊張のせいではないかと思う。他の女の子は勉強をしていた。夏休みの宿題プリントで分数であった。

この部屋は時間を間違えて、5時から起きていたそうである。小学生も27日まで補修授業があり、疲れているとのこと。熱は36.4で問題なし。

7:30朝食。やはりバイキング。集まった班からバイキングを摂る。

校長先生のお言葉の後、食法。今日の声出しはH君。児童の摂った食事をみると、野菜を摂らない子が何人もいた。そこで野菜を摂るように促して、なんとか少しでも食べるようにさせる。5年男子のA君がどうしても野

菜を食べない。まわりから勧められても、「いやだ」の一点張り。「いや」というのは、とても格好悪いということと、世界には食事ができなくて死ぬ子どもがいること、食べる物がなくなると、好き嫌いはいえないということを教えるが、それでも食べなかった。隣の子に「5年生だろう」と促されていた。

9:00算数の授業。図形の面積。Sさんが教師をするが、一人相撲で、子どもたちがつまらない顔をしていた。Kさんが急に、国語の授業を「木への漢字」から「お名前作文」にしたいと言い出したので、ダメと返事する。直前に変更した授業内容では、何を目的とした授業が分からないし、他の学生にもコンセプトが伝わっていないので、とても許可できない。

Sさんの授業は、授業進行としては失敗であるが、それはそれで経験としてよいであろう。一つの明確な目的を持った上での失敗は、今後生きてくる。しかし、その場の場当たりの、子どもに受けさえすればいいという発想の授業は、たとえ成功しても、それはなんの未来への足しにもならない。その辺を勘違いしている。

国語授業の変更によって、社会科が一時間繰り上げて行わなければならなくなったが、結局は、もとの計画通り2時間目には、木への漢字の授業を行った。

これは、非常にうまくいった。今まで習っ



オリジナルキャンドル作り



火山の噴火実験

ていないことに対する子どもの興味というのはすごい。まったくお手上げでつまらなくしている子も、ヒントを与えてやれば、一生懸命に考え込む。そして正解を言うことができることをすごく喜ぶ。

3時間目の社会の時間は、Yさんの独演会。彼女が、みごとな紙芝居を展開した。やはり戦国時代は人気があるのか、教卓にかぶりつきで聞き入る子もいた。ただし、数人は興味がないような子どももいた。

Yさんの話は上手であったが、一人で長く読み続けると、どうしても変化がなくなる。2人か3人で交代した方が、へたな読みが出ても、変化があっていいのかもしれない。

昼食後、2時半ごろに校長先生は帰られた。2:00キャンドル作り。

3:00ほうとう作り。ところが、これがうまくいかなかった。まず、食堂で野菜を切る時間が足りなかった。食堂を4時までしか借りられていないのに対して、切る分量が多かったということがあげられる。これは、小学生にすべての食材を切らせようと考えたためで、いくらかは、こちらで切って準備しなければいけない。

もうひとつは、切るべき野菜をわけていなかったことも混乱の原因である。そして、安物の包丁は切れないということだ。男子学生2人が、おやつジャガバター作りで抜けていたことも大きかった。

2階の研修室では、Bさんが一人で奮戦していた。なぜか、ここは彼女一人しかいない。これはちょっと無理である。一人で18人の小学生を相手に、ほうとう麺の作り方を教えて、しかも所在無い子どもの相手もしなければならぬわけである。

また、粉を捏ねる大鍋が一つしかないで、なかなか進まない。これでは時間がかかってしょうがない。私が、野菜切り班から、一つ借りてきて、ジャガバターが終わった鍋がきて、ようやく3つになった。

外の鍋班を見に行くと、鍋を3つ並べて蓋をせずにゆっくりとしている。煮込まなければならぬのだから、蓋を閉めるようにいうと、なんだかんだといいわけをする。

食事は予定時間を相当まわってもなかなか煮込みがうまくいかなかった。子どもたちはお腹をすかせて、麺はともかく、煮えた具だけでも食べたいと言いつつ、その気持ちが良く分かるので、大丈夫そうな麺も少しませながら子どもに食べさせることにした。ところが、この私の判断に対して、大学生が反対してきた。麺にまだ粉のままの部分があり、これを食べて子どもたちがお腹をこわしてはいけない、と主張するのである。麺の材料の粉自体に問題はないから、お腹をこわす恐れはないのだが、大学生たちは神経質になっており、万全でなければ食べさせられないという観念にとりつかれていた。



社会科授業・川中島の決戦



バーベキュー食事風景

結局、私の責任で食事を開始した。子どもたちは半煮え状態の麺でも「おいしい」と言ってお代わりをした。

予定ではこの後にゲーム大会があったが、食事が遅くなったので、それは中止とした。そのかわりにこの日の夜に、「文教戦国村カード」を子どもたちに渡した。男の子たちは大喜びであった。次の日は朝早く起きてカードゲームをしたということであった。

7月30日(火) 晴。

朝食後、学生がほぼ全員で、今日の日程変更を申し出てきた。子どもたちが疲れているから、川遊びは無しにするとか、明日の美しの森もたいへんだからやめにして、明日に川遊びをいれるとか、いろいろ大幅変更を決めてきた。

私は、とにかく日程変更は簡単にできないし、また学生同志で相談して決めることではないということ、一部の体調不良の子どものために、全体の計画を取りやめにするにはできないことを述べる。

女子学生のBさんが泣きながら、今夜、肝試しがあり、その準備を考えると、とてもスケジュールを消化できない旨を訴える。くわしく彼女の話の聞くと、昨日から付属中学の生徒たちが約30名、中学校の先生3人に引率されて、体験学習に来ており、私の知らないところで、中学校の先生たちに、肝試しの準備をすべて大学生できるように命じられてい

たらしい。それに関しては、中学校の先生には私が断ればいい話で、そんなことは気にしなくてもいいと説明した。

もうひとりの女子学生Yさんも泣きながら、肝試しは断ってほしいと言う。よほど中学の先生から命じられたことがプレッシャーになっているようである。また、昨日のほうとう作りで、いかに調理実習がたいへんかが身にしみて、今夜のカレー作りにも不安がよぎっていたのであろう。他の女子大生も泣いていた。

一旦、話し合いを中断させ、肝試しに関しては、こちらとしては人員を避けない旨を、中学の先生に伝えに行った。そのかわりにこちらで用意しているお面・人魂・蛍光テープをお貸しすることで、一応の話はついた。

このような事件はあったが、午前中の授業も無事に済み、午後川遊びを実現させた。このように精神的に追い込まれても、やるべきことをきっちりとする学生に感心した。私自身は学生たちに恨まれているだろうなと感じたが、とにかく実際の教育現場では、いろんな問題が生じながらもカリキュラムをこなしていかなければならないので、よく乗り切ってくれたと安心した。

川遊びは学寮近くの大川で行った。渓流であるが、浅くて子ども達が裸足で入るのにちょうどよい。そこまで歩いてゆく。ところが30分もすると子ども達が寒がったらしくて、

川から上がるところであった。私はヨーヨー釣りを取りに行っていた。一度は川から上がっていたが、再び川を一部堰きとめてヨーヨー釣りを実施。

しかしどれだけの子どもが「寒い」といったのか分からないが、普通なら子どもは何時間でも水遊びを楽しみたがるものである。付属小学校の生徒がひ弱なのか、引率者が過保護なのか、少々疑問に思った。

学寮に着くと、小学校のM先生の指示で、小学生を風呂に入らせた。これにより、いささか計画の手順が狂った。それほど子ども達が冷え切っているとは思えないのだが...

カレーは野菜を切るのが子どもたちは楽しらしく、切れない包丁で一生懸命切ってくれた。誰も怪我をせずに切り終えて、一安心である。怪我をすること自体は、それほどの大怪我でなければ、それも一つの経験として捉えることができる。しかし、大学生と小学校の先生の間には、「完全なる安全」が絶対条件にいつの間にかなっており、その考えに縛られている傾向が顕著にみられた。

カレーの煮込みは女子学生3人に任せる。夕食は待ちに待ったカレーなので、子どもたちは大喜び。2杯お代わりするのは当たり前で、3杯、4杯と食べる子もいた。それを予想して、すべて少なめに盛り付けるようにした。鍋も3つあり、それぞれ味付けが違いうようにした。

この日は、食後に肝試しを行った。中学生グループに場所や道具を占拠されているので、我々は電灯のともった道で、男子学生と私が茂みに潜んで驚かすという単純な肝試しに変更した。しかし、それくらいの肝試しが小学生にちょうどよかった。あまり凝りすぎると、女の子の中には怖くて興奮状態になり、寝付けない子も出てくる危険性があるとわかった。

それでも怖い話が聞きたい子もあり、私が守護霊の話などをして、楽しませた。

7月31日(水) 晴。

朝食の時、Rちゃんが、吐いた。喘息の症状である。

朝食後、Rちゃんの病状を見に行くと、学生のKさんが付き添っている。いろいろと心配になるようなことを言っているの、本人の前で言わないように指摘するが、私の意図が理解できないようで、心配し続ける。喘息の子どもには、できるだけ「その症状はなんでもない」と思わせて気にしないような精神状況にもっていかなければならない。周りが心配すればするほど、本人も重病であると思ひ込み、症状はいつそう悪くなるのだ。しかたなく、強引にKさんとRちゃんを引き離れた。

その後は、私がRちゃんの看病につく。薬は食後に飲むことになっていたが、病状が激しいので、食事なしでも薬を飲ませた。しかしそれでも、ゼイゼイと呼吸が困難な状態が続くので、病院へ連れて行くことにする。

学寮の管理人さんに「森の診療所」へ案内してもらい、Kさんの車でRちゃんを連れてゆく。病院で、口内噴射の吸入を行い、しばらく安静にして、学寮に戻る。

Rちゃんの看病で、午前中の授業はひとつも見れなかったし、午後もほとんどつききりであった。このような病人が出たときは、家族に迎えに来てもらうという体制をとらなければ、その後の活動に影響があるとわかった。午後は、美しの森へ遠足。学生9人のうち、Kさんが車係り、Sさんは帰り(他の予定があり)、残り7人なので、2人が学寮でキャンプファイヤー等の準備係り、5人が美しの森引率班と決める。

ところが男子学生の2人が、現在の学生メンバーでは、6班に各一人の学生が割り当てられないので、学寮に残る学生を、H君1人にしてくれと言ってきた。

私はRちゃんの看護をしなければいけないので、やはり学生は2人必要である。それに

引率班は5人でも車でKさんは付いて行き、現地では6人になるのだから問題ないと考えた。今まで1人で6人の小学生を見ていたのを、7人にするだけだから、それほど問題はないはずである。

横から小学校のM先生が「引率者は多ければ多いほど良い」と言ってきたが、その意見は採用しなかった。すべてに安全策をとっていいというものではない。今いる人数でどのように運営するかを知ることも学生たちにとっての勉強なのだ。単なる責任問題の回避や安全策の検討ではないのである。学生たちは不満そうであったが、学寮2人：遠足引率6人という案で押し切った。学生にしてみれば、現役の小学校の先生が言っていることが正しく感じられたであろう。しかし、5人で35人の小学生の面倒がみられないというのも、情けない話だということに気付いてほしい。

ここでも、部外者の小学校教師の発言に問題が生じたわけである。私は、ますます悪者になっていった。

学寮に学生のD君から電話があり、子どもたちは美しの森の山の頂上についたが、車でお茶を運んでいるKさんがまだ着かないので、水分補給ができない。どうしたらいいか、お茶を買ってもいいか尋ねてきた。なぜ、Kさんの車が到着しないのか、心配でもあったが、とにかくペットボトル1本を子ども3人の割合で買うように指示した。お金の問題があるために電話してきたのだろうが、こういうこともケースバイケースで自己判断して欲しい。また、子どもの幾人かが喉が渴いたといっても、あせらずKさんの車を時間を決めて待っても良い。まわりは店もある場所であり、絶海の孤島ではないのだから、あせる必要のないことである。

14:30頃に専門家の清水さんが来てキャンプファイヤーの木組みを作る。私とH君と学寮のシュフ・管理人さん・大学総務の方の5人が

手伝う。組み終わった頃に、付属中学の先生が1人現れる。

3時頃に、早くもD君から電話があり、頂上から降りてきた後は、周りには特に見るものもないので、子どもたちは間が持たない。早く迎えに来てほしいと言ってきた。

間が持たないというのは、学生たちが間を持たせられないということにすぎない。周りには自然がいっぱいあるのだから、男の子ならちゃんばらをしてもいいし、草相撲をしてもいいし、そんなことをしていれば、あっという間に時間は経つものだ。

美し森から戻ってからはバーベキューの準備。その間、子どもたちはしばしの休憩。

キャンプファイヤーが始まり、花火大会・バーベキューも始まる。喘息の子どもたちは花火などの煙を恐れて、室内から見学。女子学生のYさんが喘息の子ども達世話係をつとめた。

バーベキューの様子を見に行くと、学生たちが必死に肉や野菜を焼いていた。その光景は鬼気迫るものがあり、ひたすら何も考えずに焼き続けているという様子で、かなり義務感が表に出ていた。なぜ小学生に焼かせないのだろうか疑問に思った。子どもたちも自分で焼いて自分で食べるという体験をすれば、もっと楽しいはずである。

そうすれば、大学生も自分が食べる余裕が生まれ、自分たちも楽しめるはずである。最後の晩餐なのに、どうしてただただ小学生に食事をさせ、寝かせるということにのみ考えが凝り固まってしまったのであろうか。もちろん疲労から来る思考停止状態に陥っていることが第一であろう。

結局、小学生だけが食べたので、食材もあまり、とにかく後で食べるということで、焼くだけ焼いたが、後になっても冷めたバーベキューを食べる学生はおらず、多少は食べたもののほとんど捨ててしまった。食材を無駄にすることに無感覚になってしまっていた。

もっと、もっと遊び心を自分で見つけ出さなければ、教員として長続きしないのではないかと不安になる。

8月1日(木) 晴。

9:15学寮出発。8:30には出発できるようにしたいと伝えていたのに、学生たちには、その意識がなかった。小学校の先生が急がなければ、自分たちも許されると思っているのか。子どもたちを急がせようという意識はない。

バスで「おいしい学校」に行く。ここでは、子どもたちは熱心にパン作りの説明を聞き、楽しそうに作っていた。H君にビデオ、Yさんにチェキッコ、D君にデジカメを頼んでいたが、D君は子どもと一緒に自分がパンを作るのに夢中で、一枚もデジカメを撮っていなかった。責任感の欠如で、あきれた。

昼食は予約してあったイタリアンレストランで、パスタのランチをいただく。私はにはともあれ、初めて学生たちに感謝の意を表すことができた。小学生たちもおいしい、おいしいといってくれて嬉しかった。デザートのアイスクリュームも好評であった。

談合坂に14:00に到着。14:30までトイレ休憩とお土産購入。ぴったり14:30に出発。

高井戸には15時前に着いてしまい、これは15:30頃には小学校に到着すると思っていたところ、運転手が、首都高に入らないで、地道を走り、渋滞に巻き込まれ、結局、到着したのは16:35であった。

お迎えのお母さんたちは小学校の先生にもお礼を言う。そして、それを当然のように受ける小学校の教師。これには少し違和感を感じた。たしかに小学校教師は、心配で八ヶ岳にまで来てくれたが、サマーキャンプを計画してがんばったのは、すべて学生たちであり、小学校の先生たちではない。私も疲れていたために、細かなことに神経質になっていたのかもしれないが、気になった。

以上で私の日記は終わりである。省略され

た部分もあるが、ほぼサマーキャンプの全容はわかってもらえたものと思う。

4. サマーキャンプの課題

子どもとのコミュニケーション

サマーキャンプは通常の学校教育とは異なる教育現場であるべきだと考えている。どのように違うかという点、一日中指導者側が子どもたちと一緒に生活しているという点にある。つまり朝起きてから夜眠るまで、ほとんど一緒にいるわけである。指導者側も、8時間の限定された姿だけを子どもたちに見せればいいわけではなく、人間的なリラックスした姿も見られてしまうということである。

その人間的な面を見せるという点において、いかに子どもたちにプラスに作用させるかということが課題となる。

授業中のフォーマルな面だけでなく、休憩中の姿を見られるということは、「威厳」という点においてはマイナスであるが、コミュニケーションという点においては大いにプラスになるはずである。

単純に計算すると、4泊5日で約100時間、つまり1日8時間の学校生活から考えると、12日分を一気に子どもたちと付き合うことになる。これだけの付き合い方をすれば、小学生とは仲良くなるには十分な時間が与えられているということになる。

ところが、今回のサマーキャンプに関しては、子どもたちからのアプローチは随分あったが、学生の方がそれに充分こたえられたかという点、そうとはいえそうにない。もちろん学生たちと小学生たちは、随分とコミュニケーションがとれたとは思っている。しかし4泊5日のサマーキャンプにしては、まだまだコミュニケーション不足だという感は否めない。

それは、午前の学習の準備、午後の実験、夕食の準備、入浴指導、就寝指導などに追いまくられ、学生の側に義務感のみが募り、遊び心がなくなったからではないだろうか。

これは公的な小学校教育ではないのである。あくまで学校の外部団体が、料金を設定して行っているサマーキャンプなのである。もっともっと遊んでいいはずである。遊ぶとはいいいかげんな行動を指すのではなく、今いる環境を楽しむということである。

せっかく八ヶ岳という自然の中にやってきたのだから、少しでも自然の中で子どもたちと対話する時間をみつけないとすることが必要だったのである。そのためには、どこかで手を抜いたり、役割分担をうまくして、一日のうちでいくらかの時間は子どもとも遊べ、自分も遊べる時間を作り出す工夫が必要であった。

ところが、初めてのキャンプであり、経験も浅いことから、他の学生が主となって働く時に、自分も必ず参加しなければならないという風に考え、自由になる時間をどんどん減らしていったのであった。

夜に子どもの蒲団にもぐりこんだり、朝の寝起きを襲ったりしてもよい。お風呂も指導ではなく、一緒に入って、からだの洗いっこをしてもよい。休憩時間にはカードゲームをしたり、学寮のまわりを散歩して、草花や虫などを採集してもよいではないか。

安全性と生きる力

都会の小学生は、交通路や遊び場において、常に危険と隣り合わせにいる。かつては交通量も少なく、空き地もちらほらしていたこともあったろうが、現在は地方都市でもそのような状況は望むべくもない。それゆえ、保護者たちは子どもの安全性に非常に気を使っている気である。

ところが、実際には保護者は忙しくて、子どもをいつも監視しているわけではない。小学校に行けば、小学校関係者に子どもの安全のすべてを任せ、塾に行けば塾関係者にすべてを委ねている。公園で怪我をすれば、公園管理者の自治体に文句を言うという体質がで

きあがっている。それゆえ、子どもをあずかる機関は、子どもの安全性に異常に気を配る。もちろんそのこと自体は否定すべきことではなく、安全であるに越したことはない。

だが、ちょっとした傷や怪我を恐れている。子どもは思いっきり遊ぶことができない。走り回れば転ぶこともあり、転べば擦り傷ぐらいはできるものである。これをもしないようにしろといわれると、それはサマーキャンプをするなどと同じことになってしまう。サマーキャンプの目的の一つは、ちょっとした怪我でも気にしないようなたくましい子どもの育成にある。

たとえば、昔の子どもであれば、転んだことを恥ずかしく思い、自分で傷を水洗いして、ズキズキと痛むのを我慢しているうちに、怪我したことも忘れて遊びに夢中になる、というのが一般的であった。今は、ちょっとした擦り傷でも、すぐに応急バンを張って欲しいと言いに来る。まるでそれが当然の権利で、指導者側が応急バンを張るのが義務のような気持ちでいることが滑稽であり、悲しくもある。

「ドアに指を挟んだ」「頭が重い」「熱があるかもしれない」「足が痛い」などといった小学生の訴えを何度聞いたことであろうか。それらはすべて、自分の方を向いて欲しいというのと同義語でしかなく、実際に手当てを必要とする子どもはいなかった。

病は気からという。病気というのは「気が病む」という熟語である。ようするに自分が大したことはない、どうってことはない、と思っていれば、本当に大丈夫なことも、細かく気にしていれば、病にも怪我にもなってゆくのである。指導者側は、本当の怪我や病を見抜くように細心の注意を払わなければならないが、子どもたちを神経質に育ててはいけない。それは「生きる力」のない子を育てることになるのだ。

今回のサマーキャンプで、美しの森までの

遠足があった。片道徒歩で45分の道のりである。私は往復とも小学生たちに徒歩で行ってもらうつもりであった。歩く道は舗装道路ではあるが、両脇は森林である。寄り道すればいろんな観察ができたはずである。

ところが、結局は行きだけが徒歩となり、帰りは自動車での移動となった。これは、小学校の先生から、往復徒歩は無理だからやめて欲しいという要望があったためである。だが、本当に往復90分の徒歩が無理なのであるうか。私が小学生の時の遠足は、片道2時間くらいはざらであった。遠足という、本当に一日中歩かされた覚えもある。

それと比べると、まさに今の小学生は「生きる力」を失っているのかもしれない。もちろん小学生たちに「歩きたいか」と尋ねると、「歩きたくない」と答えるにきまっている。私も小学生の時に、一日中歩くのは嫌であった。しかしその嫌なことも、みんなと歩くから楽しさもあり、やりとげられたのである。それを学ぶことが実は大切なのだろう。

変に子どもたちを過保護にすることはよくない。嫌なことは避けたい、楽なことだけしたい、という人間に育ってもらっては困るのである。何かをする場合に、困難を乗り越えた時の感激を知ることが大事なのである。そこに教育の意味があり、人生の喜びがあるはずである。

事実、男子の何人かは、帰り道を自動車に乗らずに走ってきた。できるのである。できない、することが危険と思っているのは大人の側であって、子どもたちはいくらでも可能性と成長を秘めているのである。

小学校との関係

小学校との連携がなければ、小学生サマーキャンプなどというものは、成立しないであろう。その意味で、主催者側は、小学校教員の信頼を得る努力をする必要がある。

一方、小学校側も、主催はしないものの、

募集や集金などで協力する以上、保護者に対して、責任意識を持つことになる。すると、いきおい小学校側は、安全対策として教員をキャンプに参加させてくることになる。

キャンプの主催者側も、小学校教員の参加は、保護者だけでなく参加している小学生の安心も得られて、企画を成功させる上で有利な点があるといえる。だが、それは小学校教員が「参加する」だけで、サマーキャンプに口出ししないということが守られているという条件のもとにのみ言えることである。

何度も繰り返しているように、サマーキャンプは公教育ではない。子ども達が楽しむことが大事なのである。ある意味、お役所的な公平性は必要ない。遊びたい子は遊び、学びたい子は学ばばよい。一人一人のニーズが満たされなければ、わざわざお金を払って参加する意味がない。

ところが小学校教員はどうしても、公的な小学校教育の立場で子どもたちに接する。なぜならば、彼が小学校教員だからである。サマーキャンプが始まる前から、終わった後も彼は小学校教員として子どもたちに接しなければいけない。その立場を他人が崩せるものではない。

今回のサマーキャンプで次のようなことがあった。

学生のD君が、小学生の一人が部屋割りのグループ内でいじめにあっていと訴えてきたと報告してきた。私はD君にすぐに部屋割りを変更するように指示した。ところがD君は私よりも先に、小学校のM先生に報告しており、すでにM先生はその部屋に行き、円座になって小学生たちと話し合いをしているという。

私はD君を叱った。このサマーキャンプの世話役は君達学生であり、責任者は私である。部外者のM先生に解決を求めるといのは筋違いである。もっと自分の責任を自覚しなさいと。また、これは小学校教育ではないのだ

から、いじめが出た時点で速やかに部屋替えをするのは当然である。部屋割りは小学生たちの仲の良さ・悪さを考慮して行われたものではなく、こちらが適当に行ったものであり、それが不適當であるならば、変更することに問題はないはずである。

D君は、それでは根本的解決にならないと反論したが、私はわずか4泊5日で根本的解決は無理であり、少なくともサマーキャンプの間だけでも、楽しく過ごせるように考えてあげるのが基本姿勢であると諭した。

M先生が介入した以上、後のことを考えると、私はこの件については身動きが取れない状況になった。恐らくは、小学校の先生に諭されて、一時的にいじめは収まるが、いじめられた子どもの我慢が強いられることになるであろう。私は、その子に申し訳ない気持ちでいっぱいであった。

例えば、このような場合、小学校の先生が参加していなければ、学生も自分の判断で解決しようとしたであろうし、私の方針も簡単に実行できたはずである。小学校教員が参加することは、心強くはあるが、このような問題も生じる。

参加だけして口は出すなどはいえない。そんなことは私が小学校教員の立場でも無理である。ひとつの便法は、すべての期間を一人の教員に参加してもらう形ではなく、1泊2日程度で交代してもらい、学生との親近感が生まれにくい程度の参加にとどめていただくということが考えられる。

最後に

サマーキャンプを実施して、予想以上に準備期間の重要性を痛感させられた。また前節では小学校との関係の難しさを遠慮なく書いたが、やはり小学校サイドの協力がなければ、初めてにしてこれほど成功することはなかったと感謝の気持ちでいっぱいである。

今後とも、夏だけの関係ではなく、準備期

間も含めて、大学と小学校、大学生と小学生のコミュニケーションをよりいっそう深めて、相互にとってプラスとなるサマーキャンプを実施してゆきたいと考える。